

二十九の二 小小説拾遺一補遺 続或る僧の物語

あるとき次のような話を聞いた。これも街談巷語でたしかなところは不明だが、どうも、「二十九 小小説拾遺一」に出た僧のここのように思えるので、続編として収録する。

或る僧が、その教団では毎年開山聖人の命日のころ「報恩講」という行事があるのだが、或る年、或る寺で講師として法話をしたそう。八十九歳だということだ。もつとも、数え歳を使った時代のことだから、満で八十八なのだろう。七歳年上の妻女が亡くなってまだひと月経っていないのに、かくしゃくとして説教する姿に活力がみなぎっていた。ただし、立つて話すことが多かったのに、今日は黒板の前に立たないときはほぼ椅子にお座りだ、と言う者がいた。入院していた妻女がいよいよ危篤だというとき、枕もとで、和尚が「もうだめじゃ、どこへ行くかね」と訊ねると、さすがに寺の坊守だ、「お先にお浄土に参ります」と答えたそう。和尚が言うには、この会話をそばにいた医師や看護婦たちに聞かせたかったらしい。葬式にはその看護婦たちも参列したそう。異例なことだ。

その日の講話は、報恩講なので、法義についてはまたの機会にゆずり、ご開山の生涯を

主とするものだった。そうでなくても聴衆を魅了することの巧みな和尚は、諧謔を交えながら、よく聴くと筋立てのすぐれた話をいよいよ磨きのかかった話法で語った。

話題は承元(建永)の法難。当時、比叡山第一の智と称えられた僧源空が山を下り、専ら仏を念じることを説いて都の貴賤の心をとらえたため、南都北嶺の教団がその禁止を訴えていた。おりしも、後鳥羽上皇熊野参詣の留守中に、上皇寵愛の松虫と鈴虫が、かねてその教えに心惹かれていたのか、説教を聞いて出離の思いを生じ、ついに源空の弟子の二人の僧に剃髪してもらい、尼になった。帰京した上皇は、このことに大いに怒り、専修念仏停止の命を下して、その二人の僧を斬首の刑に処し、もう二人も死罪にする。源空は位の高い上殿の人たちにも支持者を得ていたけれども、怒りのおさまらない上皇は、専修念仏の唱道者源空とその弟子善信房ほか七名を流罪とする。源空すなわち法然と善信のちの親鸞は、僧籍を奪われ俗名を付与されて、四国と越後に配流された。その後尾ひれをつけて巷間で語られることになる事件である。親鸞が『教行信証』で「主上臣下法に背き義に違い」と書いたことは触れられなかったが、後鳥羽が承久の変で北条政子に敗れて隠岐に流されたことが語られた。ここでは、「人間がどのようなものか」と問いかけて、煩惱具足の人間のありさまに注意をうながしたのである。

多くの挿話がさしはさまれた。伝承の類の中には、真偽のたしかでないことも混じった。たとえば、南北朝の争いのあと南朝が皇位をついでいたが、なんでも明治という名の天皇は、北朝の後胤を探し出して就けたのだ、と。北と南が逆で、錯誤と混乱が含まれているらしい。その天皇と続く三代の天皇についての語り方は率直で、父をほめたと思えば子には辛い評価を下し、またその逆という按配だった。

権力に対してあまり言葉をつくらわない姿勢は、元氣のよい和尚の生来のもので、苦しかった体験にも由来する。「主上臣下法に背き義に違ひ」と書くことをためらわなかった開山の法を継ぐ僧は、戦乱の世の十九歳のころ、天皇が赤子である民を戦場に送り出すのはおかしいと公言したものらしい。当時に特別高等な警察に捕縛され、拷問を受けたという。膝に焼け火箸を押しつけられ、手を割り竹でねじられたそうだ。関節が傷ついて曲がった左手の小指をかざしての話は疑いようもない。世に伝え聞くことはあっても、被害者本人からの体験を初めて聞く者に印象を刻んだ。同じとき拷問を受けた一人は死んだ、つまり殺されたそうだ。和尚は、死んだ人の出身地と姓名をあげ、遺体を引き取りに来てその人を背負った父と遺体に手を添えた母の姿が忘れられないと語るのであった。そして人間はこういう場合でも、わしのように氣力が強くなければいけないと述懐した。幸いに

も檢非違使の少尉が寺の出身で、拷問は三日で終わり、殺されずにすんだという。

ほかにも多大の辛苦を味わった八十八年の人生が、この独特の和尚をつくりあげたのだと知られる。去る年議事堂の議員を選挙する時期に、入れ札に「バカタレ」と書けと公言したが、世が戦争にのめりこんだ時代に骨身を痛めつけられた和尚は、戦争をしてはいけないと言いつつ論すことしきりだった。議事堂が戦争法案を可決したあとも、「こういう法令ができたからには、この国はそのうち必ず戦争をするだろう、予言しておく。わしは生きておるまいが、子や孫が苦勞するのだ」と語るのであった。語った場所はみな、当時の宰相の本貫の郡のことだったそう。

その日、親鸞の法義を説いているとき、或る僧は念仏を唱えるのが上手だったが、信心に少し危ういところがあると感じたので、その僧の家族に用心なさいと忠告していたら、さきごろ首を吊って亡くなった、と和尚が話した。すると、その場の聴衆のなかに、その縊死した僧についての噂をした人がいた。宰相に戦争法案反対の建白書を出し、議事堂で反対意見を述べた学者を講師に集会を開催した人のことだ、と。その僧はまさしく宰相の本貫の地の人で、集会もその地の大きな公会堂で催されたのであった。伝聞では真相が伝わってこないけれども、世俗の事象として考えてみれば、亡くなった僧に對するその土地

の人々の非難はたいへん強く、檀家にも面と向かつて非難した人があったのかもしれない。好奇の世でありながら週刊誌に取り上げられないのは、ひよっとしたら緘口令が敷かれたのかもしれない。この国は当時も自由の許されない風土だったのである。戦争は絶対いけないとする反権力的な和尚は、思うところがあつただろうが、それについて詳しく話さなかつた。のちに聞いたところによれば、和尚はときどきその僧の寺へ出かけることがあり親しかつたという。何かを危惧したとほのめかす言葉に、言外の意味がこめられていたのだ。それに、浄土への往生はつまり大いなるはからいによって生かされていくとする生き方だから、自死をなげかわしく思っていたろう。どんな困難にも屈せず立ち向かう和尚にはことさらそうだったろう。

承元の法難の掉尾を飾るのは、法然と親鸞の惜別の場面である。時の権力によって弾圧され、強制された俗名で藤井元彦と藤井善信の二人は、それぞれ別の場所に幽閉されていたが、教団の伝承では、配流の前日夕闇に紛れて、善信房が小松谷の草庵にいた源空に会いに行ったとする。法然は七十五歳、親鸞は三十五歳、鎌倉仏教の傑出した二人の僧の生涯の別れである。二人が詠んだという和歌が紹介された。情動に訴える語り口に参会者は聞き耳を立てた。そして、冬の講話は終わった。